

平成28年度第2回芦屋市学校教育審議会 会議録

日 時	平成28年4月21日(木) 10:00~12:05
場 所	北館4階 教育委員会室
出席者	会 長 河合 優年 副 会 長 寺見 陽子 委 員 八木 順子 委 員 大永 順一 委 員 脇村 由紀 委 員 武田 和子 委 員 瀬山 久美子 委 員 渡邊 康代 委 員 稗田 康晴 欠席委員 谷川 久吉
事務局	管理部長 岸田 太 学校教育部長 北野 章 管理課長 坂惠 弘実 学校教育課長 荒谷 芳生 学校教育部主幹 中塚 景子 学校教育部主幹 俵原 正仁 管理課管理係長 山川 範 管理課学事係長 岩本 和加子
会議の公開	■ 公 開
傍聴者数	17人

1 会議次第

- (1) 開会
- (2) 会長挨拶
- (3) 議事
 - ① 会議運営上の取り決め事項の確認
 - ② 会議録署名委員の指名
 - ③ 審議
- (4) その他連絡事項
- (5) 閉会

2 提出資料

- ⑫芦屋市立幼稚園の園児数等の推移
- ⑬芦屋市における就学前児童の入園・入所率等
- ⑭芦屋市における認可保育所の待機児童数の推移
- ⑮公立幼稚園と公立保育所の施設の比較

【参考冊子】

- ・芦屋市就学前カリキュラム
- ・第2期芦屋市教育振興基本計画（平成28年度～平成32年度）
- ・芦屋市創生総合戦略

3 審議経過

<開 会>

事務局より挨拶

委員の交代

前回欠席委員及び新委員の紹介・挨拶

資料の確認

開会宣言

会議の公開決定

事務局より傍聴希望者がいることを確認し、傍聴者の入場

傍聴者の遵守事項についての確認

会議録署名

- ・会長が八木委員と大永委員を指名

<議 事>

開会

(事務局岸田) おはようございます。おそろいですので、ただいまから第2回芦屋市学校教育審議会を開催させていただきます。

本日は、大変お忙しいところ、当審議会に御出席いただきまして、ありがとうございます。私は第1回に引き続きまして進行を務めさせていただきます教育委員会管理部の岸田と申します。どうぞよろしく申し上げます。

なお、本日、この4月1日で人事異動がございまして、企画部長の米原委員が人事異動となり、新たに稗田企画部長が当審議会の委員に就任いただいておりますので、本日御出席いただいております。新たな委員名簿につきましては、本日配付しておるとおりでございます。

それでは、第1回のときに開会の前に各委員様方に自己紹介をしていただきましたので、前回御欠席されておられました委員の皆様にも、簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。それでは、八木委員のほうからお願いします。

(八木委員) おはようございます。昨年度小槌幼稚園で副会長をさせていただいた関係で、PTA協議会のほうから推薦いただきまして、今回委員のほうをさせていただくことになりました八木と申します。小学校3年生になる娘と年長の息子がいます。3年生の娘は岩園幼稚園で2年間お世話になりました。建てかえの関係で下の息子は今、小槌幼稚園でお世話になっています。幼稚園の良さを皆さんにお伝えすることができればいいなと思っていますので、よろしくお願いします。

(事務局岸田) それでは、脇村委員、お願いします。

(脇村委員) おはようございます。前回は欠席して申しわけありませんでした。

私は50年近く芦屋に住んでおりまして、人生の折り返し地点に来て、何か自分で貢献できることはないかと思って応募しました。仕事では子どもに携わることをしておりますけれども、決して教育のプロではありませんので、素人感覚で微力ながら、お力になればいいかと思っております。子どもは1分1秒成長しておりますので、いろんな教育の問題というのは待ったなしに引き返しができないことだと思っておりますので、少しでもお役に立てたらと思っております。まだ今日は緊張しておりますが、どうぞよろしく申し上げます。

(事務局岸田) では、稗田委員、お願いします。

(稗田委員) おはようございます。先ほど事務局のほうから紹介をいただきました。この4月1日に企画部長を拝命しました稗田と申します。どうぞよろしく願いいたします。

前職は同じ企画部で総合政策担当ということで、昨年度は総合計画の後期基本計画を策定し、また、芦屋市創生総合戦略という、いわゆる地方創生の取組として、芦屋市でどう取り組んでいくか、いわゆる人口減少問題に対し、どう対策を練っていくかということに取り組んでまいりました。この4月から企画部長を拝命しまして、初めて今日参加をさせていただくことになりましたが、どうぞよろしく願いいたします。

(事務局岸田) 今、稗田委員から御紹介ありました芦屋の創生という概要版を御用意しておりますので、配付いたします。

それでは、今、配付しております芦屋創生という資料も含めまして、本日の資料の確認をさせていただきます。事前に開催案内と一緒に皆様のほうには郵送させていただいておると思いますが、本日の資料といたしましては、資料ナンバー12といたしまして、芦屋の園児数の推移、A4縦の表ですね。資料ナンバー13といたしまして、就学前の子どもたちの入園や入所率の円グラフのもの、それと資料ナンバー14といたしまして、芦屋市の待機児童数の推移、資料ナンバー15としまして、前回宿題としていただきました公立幼稚園と公立保育所の施設の比較が追加資料でございます。それと、机上に本日配付しておりますのは、第2期芦屋市教育振興基本計画を、この3月末に策定しましたので、参考のために本日配付させていただいております。

もし、資料等、お持ちでない方がいらっしゃいましたら、事務局で用意しておりますので、よろしいでしょうか。

それでは、これ以降の進行につきましては、河合会長のほうでよろしく願いいたします。

(会長) おはようございます。朝10時からということで、タイトであります。ただいまから第2回の芦屋市の学校教育審議会の審議を開催させていただきたいと思っております。

谷川さんのほうが、今日公務で欠席ということをお聞きしておりますが、会としては成立しております。

それで今日から参加された3人ですけれども、先生とか委員とかといった呼称はかた苦しいかと思えます。それで、一番快適なように呼びいただいているのですが、基本、私が呼ばせていただくときは「さん」で、八木さんとか、脇村さんとか稗田さんとかいうふうに呼ばせていただきます。よろしく願いいたします。

会議の公開ですが、本日の議題につきましては、非公開にするものがございませんので、公開にすることにしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

<「はい」の声あり>

(会長) それでは、公開することにさせていただきますが、傍聴希望者の方はいらっし

やいますか。

(事務局岸田) はい。もう既に控室でお待ちですので、入室いただきます。

(会長) はい、よろしくお願いします。

<傍聴希望者入場>

(会長) それでは、審議を進めさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

本日の会議録の署名について、八木さんと大永さんのほうにお願いをしたいと思います。これは持ち回りでやっていくということでございます。

これから審議を進めたいと思いますが、第1回の会議録等については、格段、申し入れはございませんでしたか。よろしいですか。会議録、ついているかと思いますが、第1回目ものは御確認いただいたということで、第2回目に進めさせていただきたいと思います。

まず、資料番号12からということになっておりますけど、これは通し番号で、私どもの資料でいただいておりますもので、前回のものに足していただいて、最終的に資料にさせていただくために連番で途中からという形でさせていただいております。

それでは、本日の資料について、宿題があったものも含めて、事務局のほうから説明をお願いします。

(事務局坂恵) では、事前にお配りしております資料の内容を簡単に御説明させていただきます。

今回お配りしております資料につきましては、前回会議の中でいただいた御意見や御指摘をもとに作成したものでございます。

資料12、芦屋市立幼稚園の園児数の推移ですが、こちらは前回会議でお配りしております資料3の平成28年4月現在のものとなっております。平成28年の申し込み園児数から入園園児数に変更したものでございます。前回より変更のあった箇所につきましては網かけ部分にしてございます。

続きまして、資料13、芦屋市における就学前児童の入園・入所率につきまして、芦屋市に住んでいる子どもたちがどの幼稚園に行っているのかがわからないのではという御指摘がございましたので、事務局より口頭で資料2の市立幼稚園、認可保育所以外に行っている児童620人の入園・入所状況を御説明させていただきました。その内容も含めまして、資料2を新たにグラフ化したものでございます。

続きまして、資料14です。芦屋市における認可保育所の待機児童の推移につきましては、事務局から説明の中で平成27年12月1日現在の待機児童数をお伝えしておりましたので、改めて平成28年4月現在の待機児童数の年次推移と月次推移、それから現在の待機児童の内訳をグラフにしております。

続きまして、資料15につきましては、宿題となつてございました広さや設備について幼稚園・保育所での比較のできるものを出してほしいというお声がありましたので作成したものでして、表の見方としましては、1行目の精道幼稚園で言いますと、精道幼稚園は普通教室が8部屋ありまして、定員のクラス数としては、そのうち5部屋、うち実際のクラス数は2クラスですので、空き教室は3教室となっております。8部屋のうち残りの3部屋は預かり保育の部屋、図書の一部

屋、PTA室としてそれぞれ利用しております。このように見ていただけたらと思います。

冊子ですが、芦屋市就学前カリキュラムのピンク色の冊子でございます。こちらは前回会議の中でもお話が出ておりましたので、参考にお配りさせていただいております。芦屋市就学前カリキュラムは、芦屋市の全ての就学前施設が質の高い教育・保育を推進していくために公立幼稚園・保育所が取り組んでいる教育・保育の良さを引き継ぎ、共通のカリキュラムとして平成27年3月に作成したものでございます。

以上が資料の説明となります。

(会長) 何か質問はよろしいでしょうか。資料15は幼稚園と保育所の違いということですが、図書室があることや、幼稚園の中には保育室というのは当然入っておりますが、園児の減少に伴って空き部屋が出てきていて、それをどう活用されているのかというような問題も前回上がっておりました。それで教室の有効利用がきちんとしてきているのかということを出していただいております。確かに空室状況としてはこのような形になっておりますが、よろしいでしょうか。

あと、資料13、就学前の児童の入園・入所ということで、前回の資料では、4・5歳のみということで、3歳児の状況が見えなかったもので、どういうふうになっているのかということも含めて示していただいております。よろしいでしょうか。後でも、お戻りいただいて結構ですし、前回の資料を見ていただいても結構かと思えます。

それでは、質疑・応答に入りたいと思います。11時45分ぐらいを目途に1時間半ぐらいで進めたいと思います。

それで、前回のところでいろいろ御意見をいただいたり、基本的な情報を事務局のほうから御説明いただいたのですが、この委員会の進め方として、今日のところは、八木さんがいいところを伝えたいというふうに言われたのですが、ともかく幼稚園のいいところ、それを徹底的にみんなで思いつくものを挙げていきたい。例えば芦屋の良さって何なのだろうとか、私は西宮ですが、芦屋の幼稚園の良さって何だろう、幼児教育の中で、幼稚園、こんなにいいことがある、例えば地域との関連ですね。前回、谷川さんのほうから、小学校と交流しているのだというお話もありましたし、人間関係で言いましても、子ども同士のコミュニケーションとか地域が見えていると。いろんないいところがあるかと思えます。ともかく今日は、こんなところもあるのではないかと徹底的にお話ししていきたいと思えます。

時間があれば、将来的にはこういうふうな展望もあるよということもお聞きしたいと思いますがまずは、今の幼稚園のいいところについてお話ししていきたいと思えます。なぜかという、少し誤解があるかもしれないですが、廃園を前提にということで委員会が設置されているわけではなく、芦屋の幼児教育をどういうふうにしていけばよいか。もう少し一般的に言いますと、芦屋の育ちと学びをしっかりと考えなければ、この地域の行く末というものが見えてこない。このことを考えてゆく委員会であると思えます。前回の資料の中に人口動態がありましたけども、子どもがどんどん減っていくということがあります。その減り幅がどんどん大きくなっていっているということですので、できれば私どものこの委員会としては、育ちと学びをつなぎながら、子どもたちが生き生きと生きていける

ような、育っていけるような、学んでいけるような、そういう芦屋というものを考えたい。

前回も少し、精道幼稚園のお話があって、歴史がある。出版物もあるのだというお話でしたけれども、長い歴史があって、地域に根差しているという、そういう地域の思いもあろうかと思えます。ともかく、いいところというのはどういうところなのかということについて、お話、意見交換ができればというふうに思っています。絶対いいところはあるのですよ。しかし課題もあって。ですから柔軟に整理しながらよりよいものに向けて考えていきたいというふうに思っています。

ということで、またこの資料なども、これと関連して議論していただくとか、何でも結構ですので、八木さんからは、さきほども代表して絶対いいところを言いたいとおうかがいしています。言わないと芦屋はよくなる。だから芦屋に倣えというふうに言わせて初めて芦屋の芦屋たるゆえんだと思うのです。最初、八木さんのほうから、口火と言いますか、整理できていなくても結構です。お願いします。

(八木委員) たくさんあり過ぎてどういうふうにお話ししていったらいいのかわからないのですが、伝統行事や季節の行事を大切にさせていただいて、お正月会だったり、お茶会開いていただいたり、ひな祭りや七夕、お月見など、私も小さいとき幼稚園でそういう体験はしてきたと思うのですが、もう忘れてしまっていて昔の行事に参加していただく機会を、保護者もいただいて、すごくいい体験をさせていただいていると思っています。

ほかにも園庭で育てた野菜を使って調理し、カレーやおみそ汁をつくったり、もち米を育てておもちつきの体験をさせていただいたり、園内に植わっている果物を使ってジャムをつくっていただいたり、嫌いだったお野菜も、そうやって育てて調理してみんなで食べるという体験が子どもにとってはすごく貴重な体験で、うちの息子も食べられるようになった野菜があります。

それと、昔遊びもすごく保護者のほうでは好評で、竹馬だったりこまだったりけん玉を取り入れていただいている、みんなで頑張る気持ちというのもそれらを通して得ることができて、子どもたちは、チャレンジする気持ちをすごく持てるように、幼稚園に通ってなりました。

徒歩で通園できる場所も芦屋市内の幼稚園のすごくいいところでして、上の子のときは岩園幼稚園でしたので徒歩通園していて、手をつなぎながら、今日はどんなことをするのか、きのうはこんなだったけど今日はどうかとか、帰りは、今日、こんな楽しいことがあったよと話しながら登降園できる機会もすごくよかったですし、四季の街路樹の落ち葉を拾ったり、テントウムシの幼虫集めをしたり、徒歩で通園できる幼稚園の数がたくさんあるというのは本当、芦屋ならではのいいかなと思っています。

小学校の近くに幼稚園がある場所が多いので、1年生になって初めて登校するよりも前に、通園することで登校の練習にもなっていますし、1年生なのに雨の日に傘がすごく上手にさせているというのは、通園が徒歩でできたことの良さだと思います。

妊娠したときに、保健センターのほうで子育てのためのガイドブックをいただきました。第1子のときは幼稚園の情報もないですし、他のお母さんたちと知り合う場がどこにあるのかということすら知らない状態でしたが、ガイドブックを

いただいて、カンガルークラブというゼロ歳児から集まる場所があることを知り、そこに参加させていただいて、各幼稚園にサークルがいろいろあって、そこに行けば、自分の通う地区のお母さんたちとお知り合いになることもできますよというアドバイスをいただいて、私は、そのとおり、カンガルークラブに行かせていただいて、近くの幼稚園のサークルに行かせていただいて、入園前にお母さんたちと知り合うことができ、入園するときの不安も育児の不安もなく過ごすことができ、いい機会をつくっていただいたと思っています。

他にももっとたくさんあります。

(会長) きつともつともつとあるのだと思うのです。委員の皆さんがいろいろと発言されていく中で出てくると思いますし、後で少し、私のほうでもいただいたものを整理したいと思います。難しく考える必要は1つもなくて、難しい制度的なことなどは寺見さんがまとめてくれますので、また思い出したらおっしゃってください。

大永さんはどうですか。

(大永委員) 私は、なくなった浜風幼稚園の地域なので、幼稚園の評議員させていただいて、特に親と子と先生との連携がよくできていると思います。その子の1日の様子を先生のほうから親御さんのほうに伝えられて、どれだけ成長したかというのを、そういう情報の中で知っていく。子ども自身も変わっていくのですが、そういう目に見えたところや声が聞こえとか、そういうふうな情報が毎日のように行われているという良さがあると思います。

地域も幼稚園児をどのように見守るかというのを含めて幼稚園に通っている子たちに声をかけたり、子どもたちに向けての行事をしたりというふうな、地域全体で幼稚園の子どもたちを楽しみ雰囲気でも過ごさせるかというふうな、まちづくりの一環として幼稚園の位置づけというのがあると思います。保育園は地域以外にも、いろんなところから来られているのでなかなか一緒のことはできないのですけども、幼稚園の場合はその地域の中の園児がほとんどですので、自分ところの子ども、地域の子どものというふうな扱いで一緒に遊んだり楽しい行事を一緒にしたりとか、というふうなところで自治会も含めて周りでやっていくと。そういう一体となった良さといいますかね。

その子たちが小学校に上がっても、小学校のほうでもまたそういう試みもありますので、そういうつながりの中で、子どもが育っていく、芦屋は、いいところだなと多分思っていると思うのですけどね。廃園になるということで、たくさんの昔の卒園児が集まってきましたので、そういう意味で、自分が物心ついて最初に学び始めたところという印象は非常に強く残っているというふうに思いますので、歩ける距離の中にそういう園があるというのは1つの子どもたちのステップアップにもなるし、父兄の方にも地域となじむというか、そういうふうなきっかけにもなりますので。今、芦屋のこの配置の中で、1つ消えましたが、バランスよく地域の中にあるというふうに私は思っています。

(会長) はい。次は脇村さん、どうぞ。

(脇村委員) 私は精道幼稚園の出身です。まだ43号線のところにあっただけの出身なの

ですけれども、先ほど歴史とおっしゃっていましたが、まだ幼稚園の園歌が歌えるのですね。ということで、先生の顔とかは余り覚えていなくても、何か自分の中で残っているものがあるということは、子どもにとって小学校、中学校に行った後もそうですけれども、大人になって、自分が芦屋をどれだけ好きかとか、住みたいかとか、戻ってきたいかとか芦屋に貢献できるかというふうに思ってもらえるような、いい思い出というのをするとところなのではないかなというのが幼稚園の良さだと思います。

先ほど地域とおっしゃっていたのですが、私も伊勢幼稚園のそばに居り、また通勤途中のところで精道幼稚園に行かれる子どもさんが、いらっしゃるのですが、制服が余り昔と変わっていないですね。もちろんおしゃれ度合いが変わっていますけれども、何かほのぼのとした感じというのがあって、知らなくてもこちらからおはようとか、ぐずっている子にどうしたのとか、普通に道を歩いていても声をかけてしまうのですね。そういう何か、自分は幼稚園とかそういうところから遠ざかっている、まちに住んでいて、子どもたちが、通りすがりにまちの人たちも声をかけられるし、それこそお年寄りでも一人で散歩している人でもすごく声かけているので、どちらかという、幼稚園だけの問題ではなくて高齢化とか、そういうところでもいい相互作用みたいなものがあるのではないかなというふうに日ごろ感じています。

芦屋の良さということですが、数字的には西宮や神戸で園が幾つあるかということで数字で比較されていますけれども、やはり芦屋の距離感というのでしょうか、芦屋は端から端まで歩けるので、それだけで比較をするというのは、数字だけでは見られないところがあるのではないかなと思って、資料を拝見させていただきました。

国で、今、待機児童とかが問題ですけれども、芦屋スタンダードみたいなものがつくれたら、芦屋に住みたくなる、住み続けたくなるということができないのではないかなと思っています。

(会長) ありがとうございます。基本的に今までのところの、地域性みたいなものがないところであるというような形ですが、武田さん、別の視点からどうですか。

(武田委員) 今、いろいろ公立幼稚園の良さを伺いまして、本当にそのとおりでなと思いますし、大変、私立幼稚園におります者としてはうらやましく思っております。

といいますのは、私自身が、この幼児教育にかかわりまして、ちょうどことで50年になりますので、その間に私立幼稚園のことでございますと、よくいろいろその流れというのを存じ上げているものですから、7園ございました私立幼稚園がそのうち3園の廃園を順番にしていきました。現在は、認定こども園の愛光幼稚園を私立と考えますと4園残っております。それぞれの廃園を迎えるまでのいろいろなことを見てまいりましたので、私立幼稚園としましては、絶えず、危機感と申しましょうか、そういう思いですと参っております。

今、芦屋の幼稚園の良さというところに話がなっておりますので、そちらのほうの話に戻しますと、私どもが思っておりますのは、まず子どもを中心に考えて保育をさせていただいていると自負しております。特に母親が社会にいろいろと出ていけるような状況をつくっていかなければいけないような国の政策がございますので、それに少しずつシフトしていかなければいけないとは思っております。

けれども、決して子どもたちの育ちが阻害されないようにというふうなことを重点に置いていただきたいなというふうに思っております。

今まで申し上げたこともございますけど、本当に手の行き届くとても充実した芦屋市でございますので、ぜひここでいろいろな摩擦なく子どもの幸せのために、そして地域の住民のためにもいい保育がずっと続けられるとうれしいなと思っております。

私立幼稚園は創立94年が2園、63年が2園と、それぞれの歴史のある幼稚園でございます。昔から共存共栄という形で私学と、公立とがずっと来ておりましたので、これからもそのように行って、子どもの幸せのために何とかいい方法がないかなということを思っております。

(会長) 今の中で、私立の幼稚園は7園から3園減ったというふうにおっしゃったのですが、それはどういう経過があったのですか。

(武田委員) それぞれ園の事情がございまして、一番初めに閉められましたのが崇信幼稚園という幼稚園がございました。御存じの方もいらっしゃると思いますが、50年の歴史で閉められました。最後のときには7名の園児の方で保育を頑張っていたのですが、やはり私立幼稚園はそれではとても成り立ちませんので、よく頑張られたなと思って、本当に歴史のある幼稚園でございましたが閉められました。

その次に閉めましたのが音楽幼稚園で、阪急芦屋川のところにございまして、そちらはもう少し小規模の幼稚園だったのですが、学校法人になられまして、すぐお閉めになるような形になったのですけれどね。そして、浜教会の幼稚園というのがございまして、そちらも歴史のある幼稚園でございましたけれども、やはり将来の園児のいろいろなことを考えられまして、存続ができにくいというふうに思われてお閉めになりました。

そういう意味では大変、次はというような危機感を私立幼稚園は持っております。

(会長) 私学も公立も人口という、ある意味で自分たちではどうしようもないものの中にいるわけですが、私学の良さというものと公立の良さというものがあると思うのですが、私学の幼稚園の良さというか、私学の強みというものがもしあればおっしゃってください。いいところを我々は知りたいのです。どういうふうな方向に、最終的にここで決まるかは別として、いいものがあるならばそれは伝えないといけません。そういうものなしで、数の論理だけで進めていくと大切なものが落ちてしまうかもしれない。ですから私立は私立の、こういうふうな良さがあったのですよということがもしあれば共有しておきたいのですが。

(武田委員) そうですね。公立幼稚園と一緒に存続しますときに、私学としまして、ハードな部分ではとても太刀打ちできませんので、やはりソフト部分を充実させていかなければというふうな思いで日々努力を重ねております。一人ずつの教員の子どもに対する目線であったりとか、そしてそのかわりであったりとか、そういうようなところですか。そして保護者への対応ということであったりとか。それはどこでも、公立・私立関係なく、同じだとは思いますが、そういうと

ころに大変、私どもは重きを置いておりますし、子どもたちが幼稚園で生活して楽しかった、幸せな時期だったと思って幼稚園を巣立ってほしいと思っておりますので、そういうところを大変重要に考えております。

よく小学校が運動会や音楽会の代休でお休みとなり幼稚園が開いているときがございますよね、そういうときには「先生」って卒園生が来てくれるのですよね。ある意味で少し大変と言えば大変なのです。小学生が、地区の小学校の運動会があった月曜日などには30人近く来ます。別にそれは特に申し込みもなく、中にはきっちりとあした行かせていただいてよろしいでしょうかというお電話のある御家庭もあるのですけれども、もう行けると子どもたちは思っておりますし、園児のときに、そういうふうにしてお兄さん、お姉さんがやってきてクラスの中で一緒に過ごしてお兄さん、お姉さんの役をしてくれていたことを知っておりますので、喜んで来ております。そういうことが私どもの園では随分と続いておりますけれども。そういうことであつたりということは、おそらく、私学だからできるのかなと思っております。

あと、公立幼稚園のことについてよくわからないので、失礼な言葉になってしまいかもわからないのですが、規制といいますか、幼稚園としてしたくてもできにくい部分というのがきつとおありだと思うのですね。でも私学は設置者の一言で、ああいっちゃいで、できる部分がございますので、それが私学の良さかなと思っておりますし、いつまでも子どもたちが幼稚園が楽しかったというふうにご過ごしてくださることと、そしてまた卒園生の保護者で何人かおりますので、同じ園服に、同じかばんに、そして同じ机。机などは途中で作りかえておりますので、そのもの自体は変わっているのですが同じようにつくっておりますので、同じ机に、同じ園舎ということで、大変、連帯感を持ちながら喜んでいただいております。

先ほど八木委員のほうからお話ございましたように、やはり行事の折々を、いろいろなことを、とても大切に考えておりますので、そういうきめ細かいということが多分、芦屋のどの園でもなされているのではないかなと思っております。

(会長) ありがとうございます。

きっと共通なのですよね。公立も私立も基本的なところは多分、変わらなくて、それぞれのところの良さがうまくミックスできるといいし、共通の部分はきっと意味があるから共通で残ったのだと思うので、そういうところを整理しながら、芦屋全体の幼稚園というか、広い意味での幼児教育を少し議論できればなと思います。

今、幼稚園のことだけでずっと言っていますけれども、保育所は、何もしてないのかというと、そういうことは決してないと思います。後できっとまたそういう議論になるかと思えますけれども。ともかくいいところが何なのかということですね。

(寺見副会長) 私立の良さと歴史があるのは非常に大きいし、日本全国見ても、私立の方が基盤をつくられているのですよね。外国から入ってきたときに、キリスト教の布教の中でできてきた歴史というのは非常に大きかったことと、それがあつたから日本の幼児教育が発展してきました。公立には公立の良さがあり、教育委員会がバックにあるので、土台がしっかりされているし、保育の内容に関しては、

法律的には監督庁がこれを定めるというふうになっていて、監督庁というのは公立の場合には教育委員会、もっと言うと文部科学省です。もちろん公立幼稚園もそうなのですが、私立幼稚園の場合は実践されるときに、今、おっしゃられたように、園長先生が重大な役を担われる。ですから保育内容に非常に多様性がとれる。と言うと、何か教育委員会に多様性がないみたいな言い方になって申しわけないのですが、公立ですと、表現は悪いですが税金で運営されている分、同じようにしなくてはならない規制がかかってしまうのですが、私立の場合は、もちろん、幼児教育の土台はきちんととされていて、そこから上の部分が非常に多様な保育にできる。いろんな見方をされる方もあるかもしれないですが、その多様性というのはすごく大事なことだと思うのです。ですから私立の園があるから、幼稚園が非常に画一化されないというか、非常に多様な視点で持ってくるのができた、維持できたというところはすごくいいところだと私は思います。歴史的には日本の幼児教育の土台が私立によってつくられたというふうに思うのですね。現在も、公立にはできない保育の内容を展開されていると思うので、それは高く評価できる部分だと私は思っています。

(会長) それはきっと、表現はよくないかもしれませんが、経営努力ということが、多分そういうところなのかなと思うのですが。

(武田委員) 本当に多様性がございますので、下手しますと、目玉的なことをついしがちになるのが私立なのでございますね。でもそこを、おかげさまで芦屋の私立幼稚園は、みんな、何が大切か、子どもにとって何が大切か、どういうことをするのが子どものための幸せかということを皆さんしっかりと考えを持ってくださっておりますので、そういう意味では大変子どもたちにとっては恵まれたことであるかとは思っております。公立幼稚園との、いろいろな会合に、このごろ少しお呼びを頂戴しますので行かせていただきましたら、こういうことをたくさん今までも努力してこられたということを垣間見ることができまして、本当に私立幼稚園のほうもますます勉強させていただかないといけないなということは、常日ごろ考えております。

(会長) ありがとうございます。
瀬山さんいかがですか。

(瀬山委員) 本当に公立幼稚園のことをよく言ってくさって、本当に、今日うれしい日だなというのを思いました。公立幼稚園も決して危機感を持っていないわけではなくて、この3月で浜風幼稚園が単学級が長く続いたということで廃園になってしまいました。それと同時にこういう学教審も立ち上がっていますので、公立幼稚園も本当に危機感を持ちながら私立幼稚園と同じように、子どもたちに、今、何が必要なのか、何が大切なのかということを本当に中心に置きながら考えています。

芦屋の公立の良さは、大きく豊かな自然と地域だなというふうに思います。各園少しずつ状況は違うかもしれませんが、各園で、花を育て野菜を育てています。もちろん、収穫をしたりということも大切な経験ですけれども、そこに必ず虫が寄ってきます。子どもたちは、雨の日ですと、外に出られないので、ダンゴムシ

さんはどうしているかなと、涙をふきながら子どもたちが言っていますけれども、そういう生き物を通して本当に、お金をかけないで幼稚園に寄ってくる、そういう小虫たちを通して毎日の保育が展開されますし、子どもの心を育てています。命の大切さ、一番大切な教育を、そういう虫から学ぶことも大きいです。

あと、公立幼稚園は地域に支えていただいています。お祭りがとても盛んなところではだんじりを通して一緒に参加したりお話を聞いたりして、その子どもたちが将来、そういう芦屋のお祭りを支えていく子どもたちに育ってほしいなということを考えています。

私のいます伊勢幼稚園の地域でも何十年かぶりにだんじりが復活したそうで、去年、そういうお話を聞いたので、早速子どもたちと倉庫に見に行きました。知らない子どもたちもそこで触れてお話を聞く中で、芦屋にはこういうお祭りもあるのだということ子どもを通して保護者にも啓発していく、本当にいい機会になったなと思います。そういうことを地域の方から教えていただくことでそれがまた広がっていく、そういうことを大事にしていきたいなと思っています。

あと、公立幼稚園で今、考えていますのは、大きく言えば子育て支援です。在園のお子さんだけでなく地域の未就園のお子さんもどんどん幼稚園に来て一緒に遊びましょう、悩みがある方は聞きますよ、たくさん同世代のお母様方が一生懸命子育てをされている、そんな悩みを打ち明けたりできる、そんな場づくりというのにも今は力を入れています。

自慢なところは、預かり保育だと思います。全園で預かり保育ができるようになりまして、4時半までですけども、今まで幼稚園と言えば働きに行くことができないというイメージでしたが、仕事をしながらも子どもを預けることができるということで、ことし伊勢幼稚園では、保育所から3名、幼稚園のほうに移ってこられて、預かりの制度を使って幼稚園教育を受けさせたいというような方が少しずつ出てきています。ですので、この預かり保育というのも私たちは大事に考えていきたいなと今、思っているところです。

(会長) 幼・保の一元化というようなこととか、今、そういういろいろな制度的な、今までなかったようなものが使えるようになってきていて、随分と可動性というか機動性というか、といったことが高くなってきています。従前の幼稚園の枠組みとは少し違って、もう少し守備範囲が広がっていますよということですかね。

(瀬山委員) はい。

(会長) ありがとうございました。

渡邊さん、いかがですか。

(渡邊委員) 今日は公立幼稚園の良さに特化して考えましょうということですので、そこを中心に考えを述べさせていただきます。

保育所は一昔前までは6公立保育所と私立の保育園が3カ所あり、待機児童もその当時は全くいない状況でしたので、クラスの中で、四・五歳児が本当に少ない状況でのスタートでした。時代とともに待機児童がふえ、今、私立保育園がたくさんできてきているという状況に、時代の変化を感じます。

保育時間も随分と延長され、子どもが長時間、保育所・保育園の中で生活をす

るという状況になってきていますので、その中で何が一体大事なのかということ考えたときに、子どもが安全に生活をする、安心できる、また情緒豊かに育っていくことができる、そういったことが最も重要なことと思います。保育所・保育園、ともに長時間、子どもさんが生活している場ではこの点を特に大事にしながら保育をしているところです。

そのために、子どもが生活する場の、人的環境や、物的環境といった環境面が充実できるよう取り組んできました。人的な部分では私たちは研さんを怠らず進めてきましたし、また環境面においても保育所の中の環境は昔とは随分変わってきています。それぞれの発達年齢に応じた成長がしっかりと保障ができるように、一つ一つのおもちゃも整えられてきていると思っています。

保育所の変遷の中で、公立幼稚園との交流も昔からあり、運動会や生活発表会の参観に行かせていただいたり、また幼稚園の先生がこちらに来られたり、保育所職員が幼稚園の保育を学びに行かせていただいたり、そういった人的な交流もしながら進めてきたと思います。

また、ハード面も、公立幼稚園はとても充実した環境ですので、保育所のほうからいつも遊びに行かせていただいたときに、広い園庭で様々な遊具を十分に使い、経験させていただいていました。

保育所の視点で見るとそういったところが芦屋の公立幼稚園の良さであると思います。先ほど八木さんが言われたように、幼稚園の伝統的行事や、食育の取り組みなど、幼稚園の良さを伺っていると、保育所も同じようなことを実践していると思いました。やはりそれは芦屋が見渡せる市で、保育内容として大きな違いがなく、また子どもたちの遊びをより豊かにできるように交流したものを子どもたちに返していけるところに、芦屋の良さがあると思います。これから地域とのつながりや子育て支援に重点を置く流れになってきているときに、それぞれが特性を生かしながら就学前の子どもたちに同じように質の高い保育や教育を提供できることが大事になってくると思います。

(会長) 今のお話、私も思っていたのですが、子どもという視点から考えると、幼稚園も保育所も目的は、後で寺見さんにその辺りのことを教えていただこうと思うのですけれども、子どもの目線までおりてくると、自分は保育所にいるのだからとか幼稚園にいるのだからとか、余りそういうふうなことは、子どもはひょっとすると思っていない。お母さんの就労の関係で、時間的なものが違っているけれども、両方とも違わないのではないかと。ただ制度的には厚生労働省と文部科学省ということで、その違いはあるけれども、子どもの立場に立ってみると、どちらも同じようにというのがあっていいのではないかと思います。

そのあたり、最初に私がお話ししたように、幼稚園での育ちと学びということについて、子どもを見ると片方だけ置いていくようなことはできないですね。子どもは全体で成長していくわけで、育ちの部分をどう支えるか、幼稚園の中でやっていないわけではないですし、学びの部分をどう支えるか、保育所の中でやっていないわけではないですね。ですからそのあたりのところについてお聞かせください。

(寺見副会長) 河合さんのおっしゃられるとおりでと思うのですね。今、お話聞いたことについて、全体的にお話しさせてもらってもいいですかね。

(会長) それでも結構です。俯瞰していただいて。

(寺見副会長) 質問の意図は、育ちと学びをどう支えるかという意味においては幼稚園でも保育園でも一緒ではないかというお話ですね。おっしゃるとおりだと思います。

今、育ちと学びというお言葉が使われたのですが、何で成長・発達と学習ではないかということなのですか。そこが幼児教育・保育というところの大きな特徴で、いわゆる上から目線で教えるということではなくて、「学び合い」とか「育ち合い」という言葉で言われるように、幼児期は関係、つまりかかわり合いの中に育ちが生まれるからです。そういうという意味において、幼稚園も保育園も同じ役割を担っていられています。それぞれ今、お聞きしていて思ったのは、芦屋の特徴というよりも、制度的にそうなっているから、そうなっているという部分もかなり大きいかなと思います。芦屋の特性ということと言うと、今のお話の中で地域性だとか、それから全部が見渡せるということ、表現として使われたのですが、全部が見渡せるとか、そういう、ここの地域、芦屋市の地域性みたいなところに特化して考えていくのが必要なのかなと思って聞かせていただきました。

今の河合会長さんのお話、質問の意図から言えば、幼稚園と保育園が別に違うことをしているわけではなくて、同じことを担っていらっしゃるけど、ただ保護者の状況に応じて支え方が異なっているというだけのことであって、幼稚園がいわゆる保育園の機能を全然持っていないわけではないし、保育園が幼稚園の機能を全く持っていないわけではない。ただ、子どもの育ちと学びが人間関係の中でつくられているから、そこに、そのとらえ方の違いが出てくるのはあるかもしれないですね。保育園での保育・教育というのと、幼稚園の教育と、保育の部分というものは、同じことをしているのですが、とらえ方（表現の仕方）が少し違っています。しかも地域性ということが入ってくると、ここのエリアとここのエリアで、同じ幼稚園同士でも保育の中身が変わってくる、それはそこにいる人々の、特性によってということだと思えるんですね。

ですからこういうふうに良さを考えていかれるときに、余りシステムティックな部分に目を向けるよりもここで何が行われているかという、先ほどから八木さんや大永さんが言われている地域とのつながり、行事のつながりということと、プロの瀬山さんや武田さんたちでも行事でつながっているということを随分言われていたし、それが幼児教育・保育というものの特性なんだろうと思うから、その地域性として、芦屋が何を持っているのかということから、考えていく。

皆さんのお話を聞いていて、その幼稚園の良さが芦屋の地域性の、地域とのつながりということと言われていて、歩ける距離にあって、見渡せる距離にあって、私が印象に残ったのはそういうことだったのです。歩ける距離にあって、見渡せるところにあって、親と先生と子どもの連携がしっかりしているという、それはもうまさしく地域の見守り隊との連携ということだから、そのネットワークをどういうふうにつくっていくかという視点から、今後の幼児教育のあり方というもの考える、そこに良さがあるのだなと思ったのです。地域性と言ってしまったら、どこも地域性と言っているわけですから、神戸でも地域性と言っているわけですし。芦屋の地域性とは何ですかということになるのかなというふうに思

いました。

私も芦屋に、最近足しげく来させていただいて、やはりすごくいいですよ、生活のレベルが。レベルという言葉は適切ではないのですが、生活がある程度保障されていて、そういう安定した中でのこの芦屋の特性があると思うのですね。ただ、その芦屋の特性であると同時に、裏表と言いますか、その良さは、同時にそれが課題を引き起こすということもあり得る、だからそのところの整合性をどうとるかということは、課題かなというのは思うのですね。皆さんがとてもいいようにされている分、そうではない部分をどうカバーするかということがないと、いろんな人を受け入れるということができなくなるので。抽象的な言い方しかできなくて済みません。いろいろな地域に応じてという、地域性という言葉でくくらないで、その地域に応じて何ができるのかということを考えていかないといけないのかなということを思ったのですね。

ですから浜風地域は浜風地域の特性があるし、精道地域には精道地域の特性があるわけだから、その地域の特性というのをどう引き出し、そこに幼児教育なり保育がどう絡み合っていくのかと。そういう意味では自治会の方や保護者の方の連携をしっかりとっていかないと私たちには読めない部分だと思うのですね。

ですからその意味で、今、国のほうも子ども・子育て会議などと言われているけど、要は地域に応じた保育なり教育というものを考えてくださいということが、疑問として投げられていると思うのですね。その良し悪しは置いておいて、それぞれの地域で、何ができるかということを考えるときの中核的な役割を果たせるのでしょうか。

渡邊さんにお聞きしたいのですが、保育所の場合は公立でも地域をこえていろいろなところから来られていますか。

(渡邊委員) 主に地域ですね。

(寺見副会長) やっぱりその地域になるのですね。

(渡邊委員) はい、地域の方が。小学校区が基本になっていくかなと思います。精道は特に、1人か2人を除いてほぼ同じ小学校に行くという状況になっています。ただ、それこそ地域によって3カ所、4カ所に分かれていくというふうな状況もあります。

(寺見副会長) そうなりますと余り幼稚園だから、保育所だからと、考える必要性は全くなくて、そのエリアの中でどういう充実した教育ができるか、あるいは福祉の保障ができるかというふうなことを、そこを単位に、やはり小学校区単位なのですかね。小学校区単位だから小学校との連携を考えていかなとけないし、その絵をどう描くかというところで幼稚園は何が發揮できるかなという。今まで蓄えてきた実力をどう發揮できるかになるし、私立は私立で、公立にできないことをしてこられたと思うのです。いろいろな、私立でないといけないことはいっぱいあるからですね。余り具体的に言うといろいろな見方があるので差し控えますが、ですからその辺りをどう整合性を持たせていくか。これからの保育の今の動きの中では、その辺りのところの垣根がだんだん低くなってきているので、もっと自由度の高い多様性のある保育が考えていけるのではないかと思います。

(会長) ありがとうございます。

成長と学習ではなく育ちと学びというふうに今お話をさせていただいたのですが、教育というのはゴールがあります。そこへ到達させるための教育課程というものが設定されています。そこに到達することが、その幼稚園教諭であれば幼稚園教諭に、求められるし、教育委員会はそれを暗黙のうちに求めると、そういうふうになっているのですね。

教育というのがおそらく10年ぐらい前の文部科学省の中で、知識基盤社会や知財などについて幼稚園教育からしなさい、幼稚園でも、そのような、特許の話をするのかというようなことがあったのをうっすらと御記憶されているかと思います。日本のような資源のない国にとっては知識が基盤であって、勝手に人のものをコピーしてはいけませんよとか、新しいものをつくる喜びというのを幼児教育の中からはてきましようというようなこともあったのですね。

しかしながら、知識と知恵というのは少し違う。知識があってもその使い方を誤ることがある。いろいろな、今学校で起きているような問題で、原則はそうだけでも、子どもたちのところで子どもたち自身が解決する力を持ってくれないと、というような、知恵の部分があります。幼稚園の教育、保育園もそうですけど、そういう学んでいくといいますか、地域でいろいろなものを見ていくということが必要です。

日本の子育てというのは、しみ込み型といって、モデルとしての大人の背中を見ながら子どもたちがこういうふうにするんだなというふうに、いろいろなものを自分の中に吸収していくのだと。欧米は知識を伝えるという、中で、ルールでやっていくのに対して日本の今までの長い文化の中で子どもが知識を吸収するというのはしみ込み型だというのが心理学のほうで言われているのですね。しみ込み型というのは、親の背中を見て育つとか、地域の中で育っていくものです。

例えば地域の中で活動しなさいというふうに言われるものではなくて、毎日やっている中で身につく、誰か倒れていたら、おばあちゃん大丈夫とか、そういうことをしなさい、できなければあなたはだめですではなくて、自然に体が動く、自然に心がそうなるというようなもの、それは、幼児教育というふうに言われているもののエッセンスであって、お母さんは振り向いたらそこにいる、だから安心していいという。何かそういう基本的なつながりの部分というものがあって、学ぶのだと思います。主体はやはり子どもで、芦屋の子どもたちの育ちと学びをつくるのかというときの、基本になる部分かと思ったので、そういうことを申し上げました。

教員養成課程の中では、発達と学習という単元になっているのでしょうか。発達と学習という科目群になっています。いろいろなものを学習していくプロセスはどうすればいいとか、そのような話になるのですが、学びというときに、学ぶものはいろいろありますね。理屈を超えた感性みたいなものもあるのです。芦屋の子たちは感性豊かだねとか、何かすごいいろいろなものを感じて自分いろいろなことを考えていけるよねというような、何かそういう部分かなと思ってお話させていただきました。後でまた地域性の問題とかを少しお話をさせていただこうと思います。

稗田さんどうですか。

(稗田委員) 今日では公立の良さ、というお話ですので、私の知り得る限りのところで重複しないように発言させていただきたいと思っております。

大きな枠組みとしての公立・私立という枠組みの中で言うと、公立は誰でも公平に受け入れられるということと、その中で公平に同じ教育が受けられるということなのだろうと思っています。

その上で、芦屋の公立幼稚園という部分で2点ほど発言をさせていただくのですが、1つは子どもを守り育てる体制と環境ですね。少し具体的などころになりますが、芦屋市の公立幼稚園の中で、いろいろな教員が、かかわっていただいているということです。

具体的に言うと、例えば各園に看護資格を持った養護員が全て配置をされています。当然担任の教員はおります、それプラスアルファですね。例えば保育推進という、いわゆるフリーの教員が各園に1人ずつおります。それからいわゆる配慮を要する子どもたちへの配慮として加配の教員がおります。当然校務職がおります。先ほどお話の出ました預かり保育に関しても、それぞれ1人ずつ専任の職員が配置されています。恐らく他市の公立幼稚園と比較をされると、相当職員配置というのは充実をしているということが言えると思っております。

それともう一つ、環境の部分で申し上げますと、1つはハードの部分ですね。こういったところも、例えば耐震化などもいち早くやってきたことも実績としてはありますし、各園とも空調、いわゆるエアコンですね、そういったところの整備も、恐らく近隣の公立幼稚園よりは早く整備をしてきたということもあると思っております。また、市内全体の環境として、先ほどもお話の出た自然環境に恵まれているということも1つ大きな要素だと思っています。

あと、治安の面ですね。昨年、芦屋市総合計画後期基本計画をつくるに当たりまして、市民の方々にアンケート実施しました。その中に、芦屋における子育ての環境として何が一番いいかという設問に対して、圧倒的に多かったのが治安の良さ、犯罪が少ないという答えが市民の声として返ってきています。そういったところは、芦屋の公立の特徴としてあるのかなというふうに理解をしています。

それともう一点は、この部分は少し、私立幼稚園とか、ほかの公立の幼稚園、私が直接知らないのですけれども、芦屋だけを見てという感想で申しますと、園内の教育、いわゆる教員の教育を比較的一生懸命やっているのではないかという印象は持っています。いわゆるOJTと言いますか、園長を中心に各園でいろいろカリキュラム研修であるとか、いろいろ研究会を、テーマをつくりながらやっていますし、当然園だけに限らず、横のつながりの中で、市内全体の公立幼稚園、幸い8園という数がありますので、そういう交流も含めてできているという状況があるのではないかなと印象として思っております。

(会長) 実際仕事をしながら研さんを積んでいくということをおっしゃったのですが、でも、治安がいい、ということを考えていくときにシステムで考えるのですよね。システムというのは子どもがいて、子どものすぐ周りにある、例えば兄弟とか保護者とか。その周りにある地域とか。さらにその周りにある、例えばメディアとか。

ここではそういうことはないでしょうけれども、保育所をつくらうとするとうるさいからつくるなというようなことが起きたりするというのは、中心にいる子どもではない、周辺のところ子どもが環境に物申し出ることになるわけで

す。その一番外側のところに文化とか、今言われたような安寧というか、そこだったら安心してしていることができるということがあります。そういうものが相互に関係し合っていて、子どもの子育てとか育ちと学びをつくり上げているのだと思うのですほかの自治体でも、使えるような何かモデルというか、芦屋に倣えと言われるようなものも1つかと思います。芦屋のイメージってすごく何かすばらしい。

前回の会議のときもいろいろと議論が出ましたが、豊かでないとできないというのは多分子どもにとって余り幸せではありません。ですから、こういう、例えば地域に根差すとか、関係性をつくっていくとかいうのは別にどこでもできます。

昔、我々の子どものときは、道を歩いていたらどこ行くのかとか大人に声をかけられていました。何かあったときに、地域の大人同士で、見かけなかったかと聞くと、ああ、見たよとかありました。昔はそういう中で見守られていたのですね。今は見守り隊みたいな形で制度化して、やっていますよとやらないといけません。自分たちが見える中で子どもたちが育っているいろいろなものを身につけているという世界なのかなと思いました。ですから安全・安心とか、安定とかいうのはやはり大切なのですよ。

アメリカで、子どもの育ちというものについての追跡研究があって、友達とうまくできるとか、きちんと将来的に社会性を習得して社会に貢献できる人間になるというような要因で最後まで残ったのは、寺見さんも言ったようにSES (Socio-economic Status) という社会経済的地位というものが最後まで説明力を持っていた。ですから、経済力がいろいろなものに関係している。それも保護者の経済力が関係しているというのはそうなのだけれども、もし必要だったら行政が手を打てばいいわけです。必要ならば特区でもいいからされたいかがですかと。そういうことも視野に入れて、考えていかないとベネフィットというか、いわゆるコストパフォーマンスみたいなところだけで議論していくと将来大きな齟齬になるかもしれないです。

ですからそこは慎重にということですが。安心とか安全とかいうのは大事なのかなというふうに思いました。あとは質の向上というのは、ここは必須ですよ。

ということで、一応これで一巡をいたしました。寺見さんは、私学は、今の基盤をつくられたのだということと、多様性があるということ、でも、ある意味では公立はそういう、いいとこ取りと言ったら変ですけど、私学のそういうつくられたものをもってきて、そこの中に組み込んでいるわけです。公立からつくっていくということもあるけれども、そういう意味では相互作用をしながらやっているのだというふうに思うのですが。

今の話の中では、ほんのわずかだけ保育の話が出ましたが、保育は保育の良さが当然あります。

(寺見副会長) 保育に関しては皆さん共通理解されていて、もちろん一般の方々とそれを専門的にされている方の認識は言葉の使い方が違いますけれど、子ども中心で環境を重視してされているところが共通しています。

私立も公立も保育所もいいところを生かしてどうつくるかということなのですね。いいところを生かして芦屋式幼児保育・教育をどうつくるかという問題だと思っています。

今日は幼稚園のことを出してくださいと言われていています。いろいろな見方があると思いますが、公立・私立ということは置いておいて、幼稚園でしてきたことは、就学前の教育としてどう考えていくのかというところで、ずっと歴史的に取り組んでこられたし、倉橋惣三などが戦後、幼児教育をしたときには、家庭教育と就学前教育をきちんと見据えて、もう一つはどういうふうに安心して過ごすかという、養護という言葉は使ってないけど、倉橋惣三は子どもの情緒の安定と安心ということ、信頼感ということを言っているのですよね。

倉橋惣三がどうと言うよりも、その3つは昔からみんな考えてきて、ただ社会的な役割が異なるからバランスが少し違う、幼稚園の場合ですと教育的な視点が大きくなろうし、保育所の場合であればその子どものケアの部分が大きくなるであろうし、そういう違いはあった。だけど、それは時代の背景があります。おそらく今は、新しいシステムでそれをどうつくるかということが前提にあるのだと思うのです。今、会長がおっしゃった他にできないシステム、モデルというのをつくれるか、急にはみんなで何かはできないので、モデル的に芦屋市としてどういう青写真をつくって、実際に可能なのかということを考えていかなければいけないのですね。

今、何が悪いではなくて、おそらく、会長が今日意図されたのは、今までやってきたよいものをどういうふうに取り込んで新しいシステムづくりに生かしていけるだろうかということが背景にあるのではないかなと思うのです。そうしたときに、今日は幼稚園が中心でしたけど、保育所もあります。もう一つは、国の意向としては認定こども園というのできるようになるということで、全体的に言えば、今までの幼稚園・保育所という法的に決められた事柄の枠を少し取り崩しながら、今日の子どもにとっても保護者にとっても地域にとっても、望ましい新しいシステムづくりが求められていると思います。芦屋市がどういう状況かはわかりませんが、地域性が大事と言いながらも、家庭も少し変容しかけているといった感じもあります。子どもも少し育ちに気がかりな子どもがふえてきているように思います。全体的にはそういう状況の中にあって、その社会の課題解決をどうするかという視点があります。それに絡めて保護者支援をどうするか、いろいろ課題のある子どもをどうするか、そしてそのバックにある地域はどうするのか。そして、少子化の影響の部分はどう改善するかと。少子化対策は、増子化対策、それを改善していくということなのですが、これは難しいですよ、いろんなことが絡み合っているからどこからお話ししていいかわかりませんが。

今日の幼稚園というところに特化して考えるならば、公立、私立関係なく就学前教育をずっと積み重ねてこられて、小学校に入るまでに、それと別に小学校に入れるのが機能ということの就学前ではなくて、幼児期という時期に幼児期から小学校期という発達が大きく変わるわけで、その次のステップに行くために何をそこで保障しなければいけないか。その保障する内容をどういうふうに質の高いものとして提供できるかというのが視点だと思うのですね。

そう考えてきたときに、幼稚園がしてきたことというのは、かなり蓄積されたものがあって、そのあり方をどうこれからのシステムの中で生かすかと考えたとき、小学校抜きには考えられませんから、学校教育との連携と、アーティキュレーションをどういうふうに考えるかという問題も大きいと思うのです。別に小学校に入れるために就学前をやります、という意味ではなくて、小学校期に入る、いわゆる幼児期から学童期の発達にどうつながる教育のシステムをつくるのかと

いうことを考えたときに、幼稚園を潰してしまおうではなくて、今までした事柄をどう生かしてやっていくのかと考えると、その部分で今までの知見、経験が生かせるのではないかなということを思います。

どこが何を担うかというのは、それこそ行政に考えていただかないと、私はわかりませんが、今、子どもの現状、それから社会の現状を考えて、学校教育の中の現状も、小1プロブレムという問題があって、今も少子化大綱は第2期のものができているのですけれど、その中でも小1プロブレムの問題が大きく取り上げられているし、そういう社会的な課題とか、いろいろなことを考えると、小学校との連携の中でどういうふうに幼児教育からつないでいくのかというところが大きい。そうすると、そこで、幼稚園が果たせる役割は大きいと思うのですね。保育園ができないということではなくて、保育園、幼稚園ではなく、連携をよく考えた上での幼児教育をできる機関です。

例えば、オーストラリアでは小学校、幼稚園、保育所とありますが、この真ん中に1つのクラスがあるのです、レセプションというクラスがあって、小学校にあがる際そこをみんな通過していくわけです。今、多分保育所でも幼稚園でも、5歳児の、特に3学期に入ると小学校に入るための準備をされますよね。保育園もしていますよね。就学前教育という言葉を使うかどうかわかりませんが、小学校に入るための準備として、小学校を訪問してみたり、お名前呼んだら返事しましょうねとか、お椅子に座ることを意図的に工夫されてみたりとかしていると思うのですよね。そういうふうなことだけではなくて、その保育の内容の連携、幼児教育というのはどうしても経験主義なので、経験カリキュラムなのですよね。だけど学校に入ったら教科カリキュラムになるので、そこをどういうふうに、経験から学習へというシステムをどういうふうにつなげていくかというふうなところはすごく重要です。

これは今、国が言っているからとかではなくて、発達の構造が変わるからです。それまでは学びと育ちという、何か関係性の中で積み重ねられてきたものが1つの形になっていくというのが幼児期なら、もうそれができたものを使って、今度は自分の能力をどう生かして生きるかというのが学校期になるのですよね。学校期に、発達が変わっていくところをどう教育のシステムが、保育のシステムが支えられるのかということを集散的に考える機関として、そういうオーストラリア風に言えばレセプション（受付）があるのです。導入システムとしてそういうものを設ける、そこに今までの幼稚園の力が生かせると思うのですよね。公立が、私立がということではなくて、全体のシステムから考えたときに、3、4歳ぐらいまでは、いろいろな育ち方を子どもたちはしてくるけれども、小学校に入る直前にはそこを通過して、学校教育へどう移行するかということよりも、学童期にどう移行していくかという、その発達の連続性という視点で考えたときに、そういうのも1つなのかなというようなことも思ったりするのです。ただ日本はそんなシステムをとっていないから、それを義務化するというのはもちろん難しいですけど、オーストラリアの場合にはそれは義務教育ではないけど、もうほとんど義務化されていて、全員がそこを通過するそうです。

しかもそれも非常にフレックスです。あるところでは4歳から始めているところもあるし、あるところでは5歳児の後期の Semester だけとか、個人によって（保護者の選択が）異なるという。そこは外国だなと思うのですが、いろいろな民族の人がいるからということで、もう個人主義なのですよね。日本も実は多

民族なのですが…。一般に日本はひとつのように考えられがちです。日本人でもいろいろな生活状況の人も、いろいろな育ちの人がいるわけですよね。だからそういう個別のニーズに応じた形のをどうつくっていくのかということが、これからの課題だと思うのです。それは今までのように一斉に日本の教育のあり方でやっていったほうがやりやすいのですが、それがだんだんいろいろな方がいていろいろな育ちがいて、保護者の生活スタイルも異なるという中で、どう個別に応じた保育や教育が提供できるかということにこれからどんどんシフトしていくと思うのです。

ですから、向こうであるのは生活活動ありきで、それは後から、いわゆる全角にためられていって、それが計画に反映していくというような、逆サイクルをとっているのですよね。それができるかどうかは、日本の教育・保育現場の方にお聞きしないとわかりませんが、そんなふうには何か私たちが新しいことをしようではなくて、発想の転換を図っていってできることをしてみようかなと。

例えば、今、精道地区ですと、小学校と保育所・幼稚園との連携の研究会を持たれているということで、いろいろな研究の仕方があり、保育内容と学校の教科教育の連動ということもありますけど、そういうシステムをどうつくるかという視点で、例えば小学校と保育所・幼稚園、認定こども園もあり、ある時期をある幼稚園のところでそういうことを提供していく。みんな集まりなさいではなくて、皆さんのニーズに応じて就学前教育を提供していきますよというセクションを設けて、そこに希望者は来てくださいます。今、義務教育ではないので希望者としか言えません。希望者は来てくださいます。そこにももしも芦屋市にお金のゆとりがあれば、経済的な導入をされて、そこに行くのは無料ですよ。希望者は誰でも行けますよというふうな形でもってやれば、機会均等にはなるのかなと。逆に言うと、全員そこへ通ってくださいと私たちは言えないですけども、お金は出しますから希望者は行ってくださいという言い方になりますけれど、結果的には全員がそこを通過していくというふうなことを検討してみたりするのも1つなのかなと思ったりもするのですよね。

そうすれば、今までの幼児教育のノウハウがそこで生かせる。もちろん今までどおりに幼稚園も保育所もあるのですよ。その中の一部がそこに移行導入されていく。恐らくは幼稚園の空き教室でもいいけれども、小学校の空き教室でもいいし、そのためには私たちが就学前の小学校と連動した内容のカリキュラムを持たないといけないと思うのですよね。ですから、その意味では、小学校低学年と幼稚園と保育所の5歳児とがこの1つの形になった3年間だけのカリキュラムをつくると。これはしてくださいと言っているわけではありません。それこそ、その意味では芦屋市はコンパクトでいいと思うのですよね、みんながそういう考えを出し合える場があると思いますから。そういうことを取り組まれてみる、モデル的に取り組んでみるというふうにしていくのも1つなのかなと思いました。

(会長) いろいろな背景的なものも含めて寺見さんが整理をしてくれました。全体をお聞きになって、今日はいいところとか、こういうふうなところがあるのだというのでお話をしたわけですけども、ほかの委員の意見を聞いて、そうだよ、それをもう少し組み合わせるとこうだよというものがもしあれば。別の聞き方をさせていただくと、次回、私が説明というか、提案をしようと思っていたのが、一体どんな働きをしているのかということなのです。地域の中で周りにいる子どもた

ちが近くの幼稚園に行っていて、その小学校へ行くという。それが一体どういう働きをしているのか。ですから、改めて教育という大々的なことは1つも考えていないけれども、結果的には何か、地域を維持したり芦屋をよくしたりするような、何かそういう機能を持っている。例えば、小学校と幼稚園の間の交流というのはさきほど寺見さんが小1プロブレムと言ったけれども、何よりも自分よりも大きな子たち、例えば小学校1年生の子どもから見たら小学校6年生なんていうのは巨大で、自分とは違う種類のものなのだと、そういう中に入っているというのは、子どもにとっては社会性を高めていくとか、先輩・後輩で学ぶものがあるというような、そういうものを身につける機会をつくっているのではないかというふうに思うのです。

いろいろおっしゃってこられたものをまとめてみると、1つは心理的なもので、関係性ですね。親との関係性とか友達との関係性というもの。もう一つはコミュニティーを維持していく、接着剤的な役割といいますか、子どもを見たら、おはようとか声をかけるというふうになるわけで、そういう機能を果たしています。

そういう機能でいったときに、地域性というのは非常に重要ではないでしょうかということも多くの方が共通して思われており、保育所も同じような機能を果たしているのだけでも、そのあたりのところは今日十分議論はできなかったわけですが、保育所もそういう機能を果たしているけども、ひょっとすると少しだけ違うかもしれない。これはまた次回のところでも少しだけ整理をしたいと思います。そこで得られているものは、子どもが成長していく中で必要とする要素だと思います。それは思いやりであったり、自分の気持ちをうまく表出するというような、叩いて自分の思いを伝えようではなくて、順番をきちんと守ることであるとか、うまく幼稚園の中、保育園の中でもそういうふうなものがある、それが小学校の一斉授業につながっていくということなのだと思います。どういう働きをしているのかというのは整理をして考えてみたいと思います。

それと、地方創生とかいろいろなことが言われているわけですが、その仕組みというのは、お金を投下して産業育成するというところにあるのかわかりませんが、そうではなくて地域をつくっていくという非常に大きな部分というのがこういう子どもの育ちとか、子どもがそこで何を身につけていくのかということだと思います。例えば家庭のしつけができてない。今日お話の中で出なかったけど、家庭のしつけができていなくて学校で最低限これだけのことをしてくれるとうれしいよねということも学校ですべきことではないかと言われてたりするという。そこは学校へ上がる前の幼児期の問題、もうちょっと言うと乳児期のそういう信頼関係というか、安心してここにいられるのだというものの上に乗っかっているのだと思うのです。そういうものを考えると、その地域の核になるものとして幼稚園なり、保育園もその中に、認定こども園もその中でもいいと思うのですが、そういうものもあるのかもしれないです。

寺見さんは、結構ラディカルなこと言われました。

行政が財政的支援をするというのは1つの方法で、これは最後の段階でこの委員会の中で何か議論をすればいいと思うのですけどね。母親の就労と幼児教育については今日の議論の中にはなかったわけですが、どのような働きをしているのか。子はかすがいなどと言うけれども、子はやっぱり地域のかすがいかもしれない。それは保育園、保育所、幼稚園、それは重なっているところもあるかもしれないけれど、地域がそれで生き生きとしていく。

私が子どものころ、連合運動会というのがあって、それぞれの小学校区が全部集まって、またそこで競い合うという時代なのですけどね。でも何か凝集性が高まりました。それ以外でもクラスメートとか学校という単位で自分を意識することができるというのがあったと思うので、地域のアイデンティティーというか、自分がどこに生まれてどこで育つてということを考えるときには1つの機能を果たしているというふうに思います。

今日は、たくさん議論をいただきました。次は少し時間がありますので、少し考えてきていただきたいのですが、課題です。それは幼稚園のよくないところではなくて、今、言っているようなことをさらによくしようと思ったら、どんな課題があるのか。私たちが解決しなければいけないこと。さきほど寺見さんが言ったような財政的支援というのは大きな課題の1つかと思うのですが。また、人口減ですよ、これは事務局のほうにも次回は詳細に説明をしていただきたい。今日は、資料をせっかくだとつくっていただきながら、いいところということでやったわけですが、子どもが減ってきていて、充足率が下がっていているということで、やはりそれは課題だと思うのです。廃止の理由ではなくて、私たちが克服することができるならば克服するという課題だと思うのです。我々に課せられた課題だと思うのですよね。それを乗り越えることで芦屋の独自性というのが出るのだったら、それはそうすべきだと思うし、その課題というのを克服するために私たちが払わねばならないコストというのが非常に大きくなるのであれば、みんなのコンセンサスを得ないところで勝手にはそういう方向を投げられないと思うのですね。それこそパブリックコメントではないけれども1回流してみないとだめだと思えます。

それともう一つ、予測しないというか、想定の中にないさまざまな要因も考えておかなければならないと思えます。2日ぐらい前に国の会議に出ていたのですが、地震の復旧復興にかかる支援のコストというのが別の事業の中にもひよっとすると影響するかもしれないということがあったように記憶しています。そういうふうなものもひよっとすると影響するかもしれない。ですから大所高所というか、複眼的にとらえながら課題を考えてみたいと思えます。

次回でも、ここもいいところだとか、それも言ってよというのがあれば、それはおっしゃってくださっていいと思えます。その向こうには私たちがかくあるべしという志があると思えます。課題がなく何でもいいからお金投入してやればいいという時代ではない。けれども、必要ならば皆が特別税みたいなものを負担してでもみんなやればよいと思うのです。その結果として人口がふえて、10年後、20年後にはこうなるのだということを考えたらいいのではないかなと思えます。

(寺見副会長) 先ほど言葉が足りなかったので補足させていただきます。就学前のクラスの話ですが、午前中は就学前なのですが、午後からは放課後子ども支援です。午後になると、学童保育がそこで実施されます。今、会長のお話を聞きながら思ったのですが、今までやってきたからそれを存続させてどうしようという気持ちもすごくよくわかるのですが、それよりも皆さんが今まで蓄えて持っておられる知見を新しいシステムの中にどう投入して先生がおっしゃったどういう働きをしているのかということについて次回見直して、それをどう新しいシステムに生かせるかという、生産的な考え方をしていく必要があるのではないかなというふう

に思いました。

(会長) 学校教育の審議会であって、スクラップ・アンド・ビルドの会ではないので、このようにしたらどうというを出してもいいと思います。それは会長の責任で、何か批判されるのであれば、私と副会長が受ける。それでいいと思うのですが、提案してもいいと思います。

何か全体にありますか。

(大永委員) 今日の話はいろいろと吸い上げると、地域としてどう考えるべきなのかというのもある意味で学習できたと思います。保育所とのかかわりは、余りなかったもので、今度はその部分については、もう少し何か協力できることだったり行事で一緒になることがあるような、きっかけをつくりたいなというふうには思いました。今どちらかという幼稚園に偏っていましたので。

(会長) 次回はもう少しそういうところも。保育園にも課題があるかと思えますし。

(大永委員) それと、この前も言いましたけど、まちづくりの中での子どもたちをどうふやしていくかというか、新しい世代をこの地域に入れてくる、魅力ある地域にするかというのも課題として思っていますので、その辺りでも政策がもう少し見えてきたらなど。市はすぐお金ないと言います。新浜保育所以後、公立設置ということに、市はお金出すのをやめましたので。次は幼稚園にかかってきたのかと思っているのです。そういう意味での危機感というのはあるので、どこかの時点で話し合いができたらいいなと思っています。

(会長) はい。ありがとうございます。

それでは、少し時間オーバーしてしまいましたけれども、本日の議論を新しい幼稚園とか保育園、認定こども園の中にどういうふうに入れるかとか、入れられるか、幼稚園の独自性なのかとか、そういう資料をつくらせていただきたいと思っています。

そういたしましたら、予定の時間が来ておりますので、ここまでにしたいと思います。事務局のほうから何かありますか。

(事務局岸田) 熱心な御議論ありがとうございました。次回、6月議会がちょうど開催されますので、6月議会の日程をよく見ながら調整させていただいて、そのあたりで第3回目を開催したいと思っておりますので、できるだけ早く、また委員の皆様には日程のほうは御連絡させていただきたいと思えます。

それでは、本日はもうこれで閉会ということによろしいでしょうか。

(会長) 6月でよろしいでしょうか。

<「はい」の声あり>

(会長) それでは、日程等は事務局のほうで調整させていただいて。ありがとうございます。

(事務局岸田) ありがとうございます。

閉会